

皇居の生物相Ⅲ．動物相

野村周平^{1*}・大村嘉人²・奥村賢一¹・神保宇嗣¹・清拓哉¹・井手竜也¹・齋藤寛¹・
長谷川和範¹・西海功¹・篠原現人¹・吉川夏彦¹・倉持利明¹・小野展嗣¹・藤田敏彦¹

¹国立科学博物館動物研究部 〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1

*E-mail: nomura@kahaku.go.jp

²国立科学博物館植物研究部 〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1

Biodiversity of the Imperial Palace Grounds, Tokyo (The Third Survey Period): Fauna

Shûhei Nomura^{1*}, Yoshihito Ohmura², Kenichi Okumura¹, Utsugi Jinbo¹, Takuya Kiyoshi¹,
Tatsuya Ide¹, Hiroshi Saito¹, Kazunori Hasegawa¹, Isao Nishiumi¹, Gento Shinohara¹,
Natsuhiko Yoshikawa¹, Toshiaki Kuramochi¹, Hirotsugu Ono¹ & Toshihiko Fujita¹

¹Department of Zoology, National Museum of Nature and Science,
4-1-1 Amakubo, Tsukuba, Ibaraki 305-0005, Japan

*E-mail: nomura@kahaku.go.jp

²Department of Botany, National Museum of Nature and Science,
4-1-1 Amakubo, Tsukuba, Ibaraki 305-0005, Japan

Abstract. Comprehensive investigations were conducted on many kinds of animals inhabiting the Imperial Palace Grounds in Chiyoda-ku, Tokyo, as a part of the third period (2021–2025) of the biodiversity survey project of the Imperial Palace Grounds. In this project, twelve teams worked on taxonomic and ecological surveys on Tardigrada, Pseudoscorpiones, spiders, dragonflies, beetles, butterflies and moths, wasps, flies, molluscs, fishes, birds, amphibians and reptiles, and parasites. A total of 1,559 taxa were confirmed during the third survey period, bringing the cumulative number of taxa documented from the Imperial Palace to 5,345 since the first survey, through these surveys by these research teams focusing on each taxonomic and ecological perspective. The results of this survey project highlight that the Imperial Palace is a major reservoir of biodiversity within the highly urbanized center of Tokyo and demonstrate the importance of long-term, standardized surveys for detecting temporal changes in urban biodiversity. This study also provides an updated baseline for future ecological and conservation research and highlights the role of large, well-preserved urban green spaces in maintaining diverse biological communities.

Keywords: Urban green spaces, fauna, environmental change, invasive species, biodiversity.

はじめに

皇居は、首都東京の中心に位置する千代田区の
ほぼ中央にあり、天皇陛下のお住まいであり、各

種公式行事の場であるとともに、都心部における
最大の大規模緑地である。その広さは、吹上御苑
や御所、宮殿を含む宮内庁管理部分が約1.15km²、
その外側の東御苑、皇居外苑を含む総面積は約

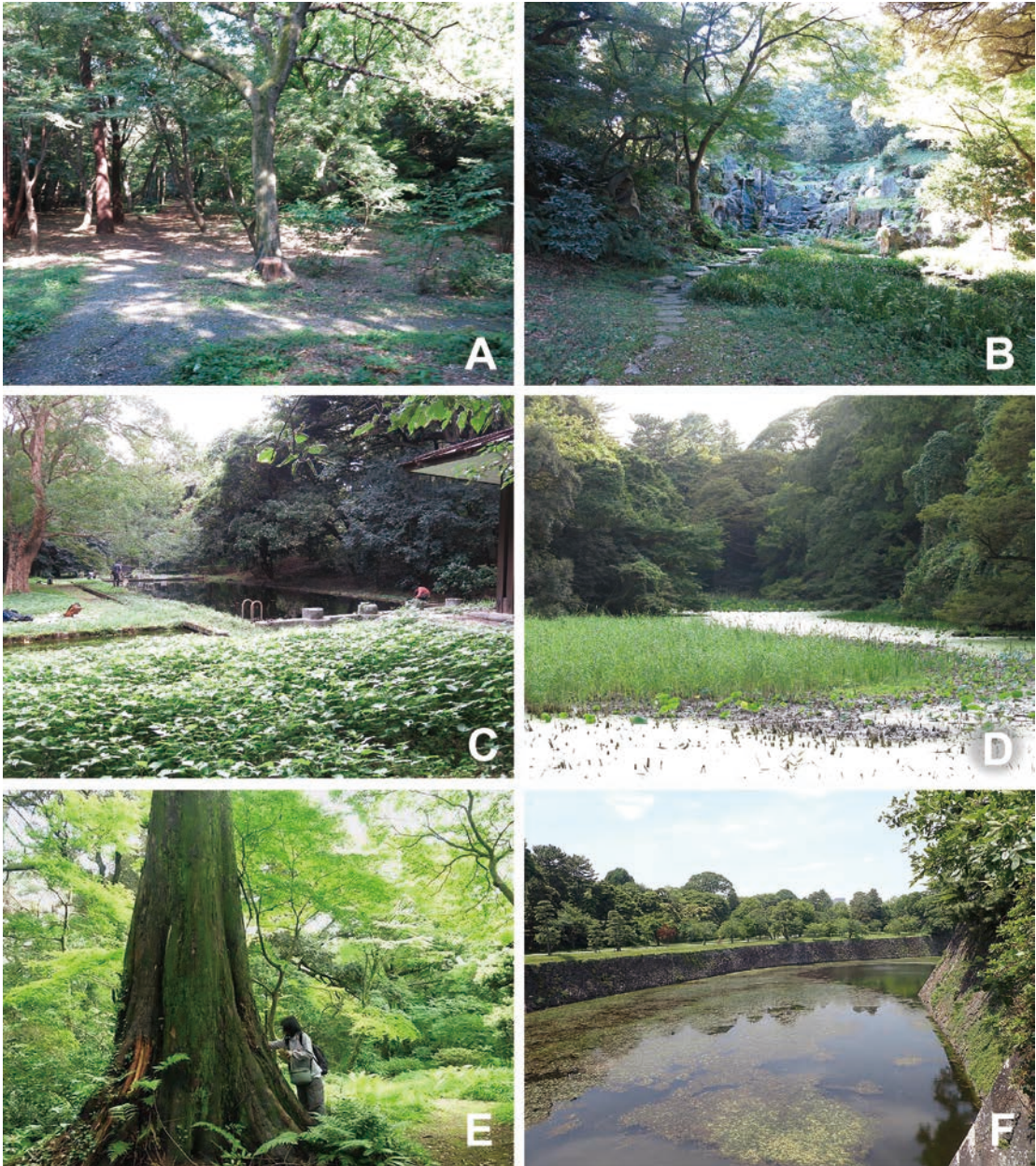


図1. 皇居内の多様な動物相調査環境。A, 昆虫の調査環境1 (覆馬場跡) ; B, 同左2 (大滝) ; C, 同左3 (旧プール) ; D, 同左4 (中道灌濠) ; E, クマムシ類の調査環境 (大木根元のコケを採取) ; F, 魚類の調査環境 (乾濠)。

2.3km²とされている。自然環境の観点から見ると、皇居はもともとの森林が維持されてきた原生的環境ではなく、古くは江戸城の用地として利用されてきた経緯がある。しかし、およそ100年以上にわたって、人為的な改変やかく乱を最小限に抑え

た管理が続けられてきており、吹上御苑の内部や道灌濠の周囲には巨木、古木が亭々として茂り、原生林に近い極相林として存在している。その周辺には道灌濠の水面や人工の滝、若干の草地や石垣など、森林と水域が入り交じる、きわめて多様

表1. 皇居生物相調査における動物各群の第Ⅱ期までの確認種数, 第Ⅲ期の確認種数, およびこれまでの累積種数一覧.

対象群	Ⅱ期まで*	Ⅲ期	I～Ⅲ期累積種数
鳥類	97	80	107
哺乳類	4	0	7***
両生・爬虫類	12	11	12
魚類	10	15	16
環形動物	23	0	23
緩歩動物	22	5**	27
甲殻類	28	3	28
クモ類 (カニムシを含む)	195	138	216
ダニ類	105	0	105
その他の土壌動物	68	0	68
貝類	55	48	64
魚類寄生虫	10	47	50
動物プランクトン	155	2	157
有翅昆虫類	3,545	1,210	4,374
無翅昆虫類	91	0	91
合計	4,420	1,559	5,345

*今回, 各群で計算し直したので, 従来の数字と異なっている場合がある; ** 新規追加のみ.; *** 調査期間外で確認された3種を含む.

性に富んだ環境が展開している (図1).

当地における生物相調査については, 平成8年度～平成12年度 (1996～2000) における第Ⅰ期調査を皮切りに, 国立科学博物館による調査が断続的に実施されている. 第Ⅰ期調査の結果は平成12年3月に国立科学博物館専報第34～36号に記録された. この第Ⅰ期調査の直後から, 主に動物相について継続的な調査を実施しようとする機運が高まり, 平成13～17年度に「皇居の生物相モニタリング調査」が実施された. その調査結果は平成18年 (2006) 3月に出版された (国立科学博物館専報第43号). 第Ⅱ期調査は平成21～25年に行われた. この第Ⅱ期では平成21～24年に本格的な調査が実施され, 補足的な調査と調査結果の取りまとめが平成25年に行われた. この調査結果の取りまとめは平成26年 (2014) 3月に出版された (国立科学博物館専報第50号).

今期第Ⅲ期における調査対象としては, 以下に示すような, 各動物群に対応した12の班 (科博側の調査担当幹事) に分け, 外部からの調査員の補助を得る形で, 実際の現地調査に臨んだ. 1) クマムシ班 (幹事: 大村嘉人), 2) カニムシ班 (幹事: 長谷川和範), 3) クモ類班 (幹事: 奥村賢一), 4) トンボ班 (幹事: 清 拓哉), 5) 甲虫班 (幹事: 野村周平), 6) チョウ・ガ類班 (幹事: 神保宇嗣), 7) ハチ・ハエ類班 (幹事: 井手竜也), 8) 貝類班 (幹事: 長谷川和範), 9) 魚類班 (幹事: 篠原現人), 10) 鳥類班 (幹事: 西海功), 11) 両生類・爬虫類班 (幹事: 吉川夏彦); 12) 寄生蠕虫班 (幹事: 倉持利明).

本調査で得られた標本は, 今後の比較研究に役立てるため, 原則として国立科学博物館に保管されるが, 重複標本など一部は調査担当者が所属する大学や研究機関, 博物館などに一時的に保管さ

れる。本調査の結果、第Ⅲ期で確認された分類群数（便宜的に、以下「種数」として扱う）は、動物全体で1,554種、第Ⅰ期からの累積では5,345種となった。各調査対象群の種数の詳細は表1に示した。

研究成果の概要

各調査班の今期（第Ⅲ期）の研究結果の概要は以下に示す通りである。

1. クマムシ班

調査メンバー（註1）：鈴木 忠、杉浦健太、吉村玖桃、井上侑哉、大村嘉人。

研究結果概要：緩歩動物であるクマムシ類について、皇居のファウナは第Ⅰ期の調査で、Abe & Takeda (2000) によって22種（本論文では誤って21種とされていた）が記録されていた。今期においては、2023年度に1回、2024年度に2回の調査を行い、その結果、第Ⅰ期には記録されていない4属5種を見出した。また、すでに記録のある22種についても再同定を行い、現在の分類体系の中に位置づけた。

2. カニムシ班

調査メンバー：長谷川和範、齋藤 寛、上島 励、秋山 允。

研究結果概要：陸生節足動物の一群であるカニムシ類について、皇居のファウナは従来3回の調査が行われ4科4種が知られていた。しかしこれらの調査は土壌性種のみを対象としており、それ以外の種については明確になっていなかった。今期の調査では皇居内の様々な環境からの見つけ採りとシフティング、ソーティングによる採集を行った。特にこれまでに記録がない樹上性の種に注目し、樹木の樹皮下を重点的に探索した。その結果、5科5種が採集された。このうち土壌性の3種はすでに皇居内から記録されているが、樹上性の *Anatemnus* sp. とオオウデカニムシの2種が皇居から新たに記録された。前者の *Anatemnus* sp. は、日本から初記録属であり、未記載種である点、非常に注目される。

3. クモ類班

調査メンバー：奥村賢一、小野展嗣、水越かのん。

研究結果概要：皇居におけるクモ類の調査は第Ⅰ期（1996–2000）、モニタリング（2001–2005）、

第Ⅱ期（2009–2013）において行われ、2013年末までに累計191種が確認されていた。今期の調査（2021–2025）では、特に、希少種の生息状況の確認、環境変化が種・個体群に与える影響、外来種の確認に重点を置いて調査を実施した。その結果、約2,100個体が得られ、これらは32科138種に分類された。今回初めて確認された種は外来種4種を含む20種だった。上に記した従来から記録のある種数に加えると、総計211種となる。過去の調査地としては対象外で、今季初めて実施した皇居東側、東御苑でのみ確認された外来種が3種あり、うち1種は確実に定着していた。また、過去に生息が確認されていたものの、今回は確認できなかった種が73種あった。中には、一般的によく見られる種で、当初は確認できると考えられていた種も複数含まれていた。

4. トンボ班

調査メンバー（註1）：清 拓哉、喜多英人。

研究結果概要：トンボ類については今期の調査で37種が記録された。そのうちイトトンボ科のホソミイトトンボとサナエトンボ科のタイワンウチワヤンマの2種は皇居からはじめての記録である。少なくとも前者は、比較的最近に外部から侵入し定着したようで、気候変動の影響を受けた可能性が高い。後者については確認例がすくないものの、分布域の北上の状況から考えて、皇居内で個体数が増加する可能性が十分にある。首都圏におけるトンボ類の生息地の回復はたびたび報告されているが、今期の皇居調査では絶滅危惧種の新たな記録はなかった。第Ⅱ期調査（2009–2013）で記録された種のうち6種（オオイトトンボ、コオニヤンマ、トラフトンボ、ハラビロトンボ、キトンボおよびマイコアカネ）は、今回確認することができなかった。また、今回記録された種のうち、流水域に生息するのはオニヤンマ1種のみである。残りの36種はすべて止水域に発生する種である。このような生息環境の止水域への極端なかたよりは、東京都心部の都市緑地では共通する現象である。

5. 甲虫班

調査メンバー：野村周平、上田衛門、松原 豊、山崎裕志、亀澤 洋、金子直樹、樽宗一郎、内海幸弘、柿添翔太郎、大島千幸。

研究結果概要：甲虫類では、10名からなる調査

チームを組織し、第Ⅲ期の5年度で通算144回の調査を行った。従来行われていた随時採集に加え、バナナトラップやライトトラップを用いたトラップ調査も精力的に行った。第Ⅲ期調査の開始時に、それまで皇居から記録されていた甲虫を取りまとめたところ、929種が確認されていた。そして今回、2021年7月から2025年7月までの第Ⅲ期調査で、199種の甲虫が新たに皇居のファウナに加わった。各種の生息環境、寄主植物（食植性種の場合）、および行動生態などについては論文中に詳述した。これらのうち9種が外来種である可能性が認められたが、そのうち6種についてはやや疑わしい。

以上新たに加わった199種を含め、第3期終了時までに皇居から確認された甲虫種を、現在の分類体系に沿って書き出したところ、79科1,122種がリストアップされた。種数が多かった5つの科を多い方から列記すると、ハネカクシ科181種、ゾウムシ科156種、オサムシ科98種、ハムシ科84種、テントウムシ科50種、であった。

上記の甲虫相調査と並行して、夏季にベートトラップで採集される大型コガネムシ類の発消長について調査した。吹上御苑内3か所にバナナをエサとしたトラップを各箇所6本（地上約1m 3本、地上約4m 3本）を設置し、2022～2024年度の3年度それぞれ6月～9月の間、毎週トラップの回収、計数、再設置を繰り返した。2022年度は14回、2023年度は16回、2024年度は15回の回収を行った。回収により採集された虫は捕殺せず、データを取った後、採集地の周辺で放逐した。以上の調査の結果、クワガタムシ科2種（コクワガタ、ノコギリクワガタ）、コガネムシ科7種（カブトムシ、コカブト、カナブン、クロカナブン、シロテンハナムグリ、シラホシハナムグリ、リュウキュウツヤハナムグリ）の合計9種が確認された。第Ⅱ期（2009–2013）に行った同様の調査と比較すると、新たにシラホシハナムグリ、リュウキュウツヤハナムグリ、クロカナブンの3種が加わった。また第Ⅱ期調査で1頭のみ確認されたヒラタクワガタは第Ⅲ期では確認されなかった。国内外来種とされるリュウキュウツヤハナムグリは、2023年度に本調査で3頭、本調査外で1頭の合計4頭が得られたのみで、他の年度には確認されておらず、この種の出現、定着ははまだ確定的ではない。

さらに、皇居内の多様な水環境に生息する水生甲虫の動向についても調査を行った。これまでに

皇居内からは第Ⅰ期の調査までに5科23種の水生甲虫が記録されており、それ以降の調査がなかった。今回の第Ⅲ期の調査の中で、タモ網等を用いた一般採集と、吊下げ式ライトトラップを用いたトラップ調査を行って、水生甲虫相を調査した。その結果、コツブゲンコロウ科1種、ゲンゴロウ科6種、ガムシ科4種、ダルマガムシ科1種の、計4科12種の水生甲虫が確認された。今回、新たに3種（ニセコウベツゲンゴロウ、ヒメセマルガムシ、ミヤタケダルマガムシ）の新記録種が見いだされた。これを第Ⅰ期以前の調査結果と合わせると、皇居内からは6科26種の水生甲虫が知られることになる。しかし一方で、過去に記録のあった14種は今回の調査では確認できず、総体としては、明らかな減少傾向が認められた。

また、今回得られた大型コガネムシ類である、シロテンハナムグリ属 *Protaetia* 3種（シロテンハナムグリ日本本土亜種、シラホシハナムグリ名義タイプ亜種、リュウキュウツヤハナムグリ奄美大島亜種）を対象に、ミトコンドリアDNA COI領域（629 bp）に基づく集団遺伝解析を行った。その結果、3種間で対照的なハプロタイプ構造が確認された。シロテンハナムグリでは、8個体すべてが異なるハプロタイプを示し、地理的まとまりを欠いた高い遺伝的多様性が認められた。シラホシハナムグリでは、23個体から3つのハプロタイプが検出され、全体として多様性は低いものの、北海道および皇居に固有系統が存在し、さらに複数地域で共有されるハプロタイプも確認された。リュウキュウツヤハナムグリでは、皇居ならびに伊豆諸島伊豆大島および三宅島で得られた13個体のほぼすべてが単一ハプロタイプを共有し、COI領域における遺伝的多様性は極めて低かった。これらの結果は、各種における分布史、集団サイズ変動、遺伝子流動様式、ならびに人為的移動の影響が異なることを反映している可能性を示す。特に皇居集団では、複数種において遺伝的に異なる系統が同所的に存在しており、過去の複数回の侵入や導入を示唆している。

6. 蝶・蛾類班

調査メンバー：神保宇嗣、矢後勝也、岸田泰則、中島秀雄、朝日純一、枝恵太郎、飯森政宏、久保田繁男、岡 太陽、阪本優介、山口真毅。

研究結果概要：2021年から2025年にかけて皇居内でチョウ目蛾類のインベントリ調査を行った結

果、蝶類5科49種、蛾類44科501種が記録された。この中には皇居内で長きにわたって生息し、皇居内の多様な環境に依存し、継続して生息している種もあれば、今回新たに生息が確認された外来種や温暖地から移入してきた種も含まれている。今回の調査で皇居内から新たに見出された種は蝶・蛾類あわせて56種で、第I期から今回に至るまでに確認された総種数は蝶類5科59種、蛾類55科1,028種に達した。論文中では、本調査および過去の調査結果に基づき、絶滅危惧種、皇居の蝶類相の位置づけや保全における役割、地衣類食性の蛾や冬季に成虫になる蛾など、いくつかの注目すべきテーマおよび分類群における動向について考察した。都市の最も重要な緑地の一つから得られた長期にわたるモニタリングデータは、都市生態系を理解するための基礎情報を提供する。これらのデータを利用したさらなる分析は、都市環境における動物相の解明に大きく貢献することが期待される。

7. ハチ・ハエ類班

調査メンバー：井手竜也，阿部純大，金杉隆雄。
研究結果概要：ハチ類では、有剣類 (Aculeata) について、第I期、モニタリング、第II期での調査結果に加え、今期の調査 (2021–2024) での採集結果に基づいて、皇居産種のリストを最新の分類体系に合わせて更新した。その結果、合計で16科115属258種が認められた。今期の調査で、キバラハキリバチ (*Megachile (Amegachile) xanthothrix*) が新たに確認された。

また寄生蜂類 (Parasitica) について、これまでに報告がなされていなかったシリボソクロバチ科について、第I期から第II期までの未整理標本の同定と吹上御苑内での追加調査を行い、8属8種を記録した。このうち4属4種は東京都で初めて確認された。さらに、タマバチ科を始め、タマバエ類 (ハエ目)、アブラムシ類 (カメムシ目)、ゾウムシ類 (コウチュウ目) などの食植性昆虫によって植物上に形成される虫えい (虫こぶ) について2021年から2024年にかけて採集調査を実施し、皇居で見られる虫えいのリストを更新した。その結果、19種類の虫こぶが新たに記録され、第I期からの累積として、24種の植物から合計39種類の虫こぶが認められた。これに伴い、虫えい形成者としてタマバチ科6属12種が新たに記録された。

ハエ類では、これまで皇居からは全く記録がな

かったヌカカ科について初めて調査を行い、2022年から2024年にかけて実施したヌカカ用ライトトラップを用いた調査によって、6属7種が見出された。また、上記の虫えいについての調査に伴い、虫えい形成者としてタマバエ科2属2種が新たに記録された。

8. 貝類班

調査メンバー：高野剛史・脇 司・倉持利明。
研究結果概要：陸生および淡水生の軟体動物について、今期の調査では、陸生36種、淡水生12種の合計48種が認められた。また、46種の証拠標本についてCOI遺伝子の配列が決定された。今回皇居からは腹足類6種 (オオタニシ、トクサオカチョウジ、ウスイロシタラ、オオコハクガイ？、ヒメオカモノアラガイ、ミズコハク) と二枚貝1種 (チビマメシジミ) が新たに記録された。これらのうち、オオコハクガイ？とヒメオカモノアラガイは2010–2012年に行われた前回の動物相調査以降に皇居に持ち込まれたものと考えられる。これまでの報告と合わせると、皇居で記録された陸生貝類と淡水生軟体動物の総種数はそれぞれ、46種と16種になる。

9. 魚類班

調査メンバー：篠原現人，中江雅典，林 公義，岸田宗範，藤原恭司，佐藤真央。
研究結果概要：魚類については、第I期に調査が行われて以降、四半世紀ぶりの調査が行われた。2024年度春季および秋季と、2025年度夏季に行われた。第I期では上・中・下道灌漑を対象としたが、今期はこれに加えて蓮池濠，乾濠，平川濠，天神濠，白鳥濠，二の丸池および吹上御苑内の小規模水域を対象とした。また今期の調査では採集調査と目視観察に加えて環境水中のDNAメタバーコーディング調査を行った。その結果、皇居内苑には少なくとも15種の魚類が生息することが確認された。従来皇居外苑濠から記録されていたヌマチチブが、今回の採集調査によって初めて内苑濠 (平川濠・天神濠) から確認された。ソウギョ (乾濠・天神濠) とハクレン (天神濠) が目視観察のみで確認され、環境DNAにより生息が示唆された。ニホンウナギ (平川濠・天神濠) とキタドジョウ (中道灌漑・下道灌漑) は、環境DNAにより生息の可能性が示されたが、標本の採集はされなかった。吹上大池では、過去に系統

保存の試みとしてシナイモツゴが放流されていたが、今回、採集標本および環境DNAにより生息が確認された。1986–1999年に主として中道灌濠において報告されていたメダカは、環境DNAも含め今回は確認できなかった。他方、メダカと競合するとされるカダヤシが、中道灌濠をはじめ多くの水域で多数採集された。1997–1999年に上道灌濠で多く採集されていたギンブナは、今期は発見されなかった。

10. 鳥類班

調査メンバー：西海 功，樋口亜紀，黒田清子，小林さやか，齋藤武馬，安藤達彦，安西幸栄。

研究結果概要：鳥類に関しては、2010年代に皇居を含む東京都心の緑地で繁殖が認められ始めたウグイスとエナガ個体群の遺伝的構成について調査した。都市部および非都市部における鳥類個体群の遺伝的多様性と遺伝的構造のパターンには異質性があり、種または地域特異的であることが知られている。東京都心の緑地では、1970年代以降、繁殖する鳥類の種数は10年ごとに2～4種増加している。著者らは、2010年代に繁殖を開始したスズメ目2種、エナガ (*Aegithalos caudatus*) とウグイス (*Cettia diphone*) の繁殖個体群、越冬個体群、および周囲の森林個体群からマイクロサテライトDNAを解析し比較した。両種とも、東京繁殖個体群は、対立遺伝子数、シャノン指数、期待ヘテロ接合性など、すべての指標において遺伝的多様性が最も低いことを示した。しかし、東京の越冬個体群は2種間で異なり、エナガ個体群は埼玉繁殖個体群よりも多様性が低く、ウグイス個体群は多様性が高かった。個体群分化検定およびNeiの遺伝距離から、エナガ個体群は埼玉県、千葉県、東京都心部で分化がみられるのに対し、ウグイス個体群では分化が小さいことが示された。ウグイスについては、東京の繁殖個体群と越冬個体群の差は、東京個体群と埼玉個体群の差よりも大きく、越冬個体群の遺伝的多様性が高いことから、東京の越冬個体群は複数の地域で繁殖する個体で構成されている可能性が示唆された。エナガは東京都心部まで分布を拡大し、越冬個体群が直接繁殖個体群に移行したと解釈される。ウグイスは森林地帯で繁殖し、都心部で越冬し、一部の個体は都心に留まり繁殖を開始したと解釈される。エナガはウグイスに比べ、個体群間である程度の分化が見られるが、どちらの種も遺伝的多様性に極端

な減少は見られず、周囲の個体群との間で一定レベルの遺伝子流動が起きていると考えられる。

また一方で、皇居と赤坂御用地におけるオオタカ (*Accipiter gentilis*) とフクロウ (*Strix uralensis*) の2001～2025年における繁殖状況について調査を行った。両種の調査地はいずれも江戸時代以来400年以上にわたり継続的に保護管理されてきた成熟林であり、巨大都市の中心部に残された緑地として貴重な存在である。2つの調査地で初めて繁殖が確認された2001年からの繁殖の有無、営巣状況、並びに確認された巣立ちヒナの最小個体数を年ごとに整理した。調査においては巣箱などの人工的な繁殖補助構造物を用いず、すべて自然条件下で繁殖状況を確認した。オオタカは両調査地において断続的に繁殖していたが、より自然度の高い森林での繁殖事例と比べると繁殖成功率は低く、2022年度以降は繁殖が確認されていない。フクロウは繁殖開始は遅かったが、近年は比較的安定した繁殖が認められた。2025年には赤坂御用地において2つの繁殖エリアが成立していた。

11. 両生類・爬虫類班

調査メンバー：吉川夏彦。

研究結果概要：2021年から2024年にかけて、皇居および北の丸公園において、両生類と爬虫類の生息状況調査を行ったところ、カエル2種、トカゲ3種、ヘビ3種、カメ3種の計11種が確認された。前回2000年の調査ではヒガシニホンアマガエル (*Dryophytes leopardus*) が記録されていたが、今回の調査では確認されなかったため、この地域では絶滅している可能性がある。皇居内ではヒキガエルは個体数が大幅に減少し、今期は幼体が1頭のみ確認されるにとどまった。この現象は北米原産の国外外来種ウシガエルの蔓延によるものと考えられた。一方爬虫類の種構成に大きな変化は見られなかった。スッポン類においては、皇居内の閉鎖水域において純粋なニホンスッポンが確認されたほか、外濠においてニホンスッポンと外来スッポンの交雑個体が初めて確認された。皇居の生息する爬虫類・両生類の中では、両生類は絶滅の危機に瀕しており、唯一残存する在来両生類であるアズマヒキガエルの保全に向けた緊急の取り組みが求められる。

12. 寄生蠕虫班

調査メンバー：倉持利明，巖城 隆，高野剛史，

佐田直也，小川和夫，脇 司。

研究結果概要：陸生および淡水生の動物に寄生する寄生生物（寄生蠕虫類，ダニ類，甲殻類）について調査し，得られた寄生虫について形態学的及び分子生物学的手法により同定を行ったところ，未同定種を含む55種が確認された。Shimazu *et al.* (2000) および武田ほか (2000) が記録した蠕虫類および甲殻類のうちの4種については今回認められなかった。一方陸生および淡水生の軟体動物，両生類，爬虫類に寄生する蠕虫類，甲殻類および魚類寄生の単生類，鉤頭虫類については，先行研究はないので，すべての種が皇居初記録となる。

註1：各班メンバーは基本的に令和7年度の登録によったが，一部実情に合わせて修正した。

謝 辞

上皇陛下におかれては，第Ⅰ期調査より本総合研究の発端をお作りいただいた。また今上陛下におかれては，第Ⅲ期調査においても，実施に当

たって皇居生物相調査継続についてのご理解とご支援を賜った。心からの尊敬と感謝を申し上げます。また，日中および夜間における現地調査に全面的に協力していただいた宮内庁侍従職，庭園課，生物学研究所，赤坂御用地の職員各位に，調査員一同，心より感謝の意を表する次第である。

引用文献

- Abe, W. & T. Takeda, 2000a. Tardigrades from the Imperial Palace, Tokyo. *Memoirs of the National Science Museum*, No. 35: 165–177.
- Shimazu, T, T. Kuramochi, J. Araki & M. Machida, 2000. Digenan, cestode, and nematode parasites of freshwater fishes of the Imperial Palace, Tokyo. *Memoirs of the National Science Museum*, No. 35: 211–231.
- 武田正倫・島津 武・浦和茂彦・荒木 潤・倉持利明・町田昌昭，2000. 皇居の内濠産エビ類および魚類から得られた寄生性甲殻類. 国立科学博物館専報，No. 35: 5–78.